
金色フェスティバル

遊森 謡子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金色フェスティバル

【Nコード】

N1799T

【作者名】

遊森 謡子

【あらすじ】

『異世界より領主の花嫁召喚、街のどこかに現れます。春祭り期間内に発見・保護した人に金一封！』…って、お祭りのイベントで人を召喚するな！こうなったらせめて、期間中は絶対つかまってやるもんか。『領主の花嫁』ってとこだけテンプレ、後は色々やります。

第一話 異世界トリップは変装道具持参で

その日はただ、買い物の帰りにふと思いついて、珍しく図書館に寄っただけ。そのはず、なんです。

日曜日なので大勢の市民が訪れていたけれど、基本的に図書館という場所は静かだ。音といえば密かな足音、誰かの咳ばらい、甘える子どもに応える母親の抑えた声。それくらい。

大きめのトートバッグを肩にかけ直しながら、私はビデオ・DVDコーナーをうろついていた。うーん、やっぱり図書館には置いてないか。明日、会社の帰りにでも、おとなしくレンタルショップ行くか。そして、出入り口に向かおうとして大きな本棚をクルリと回り込んだ時、気づいたのだ。

図書館から、急に人影が消えたことに。

「あれ？」

私はきよろきよろとあたりを見回した。本棚の林が立ち並ぶ空間には、私以外誰もいない。貸出カウンターまで空っぽ。なんで？まだ閉館時間じゃないよね？

ていうか、この図書館こんなに狭かった？これじゃ、図書館というより学校の図書室みたい。似ているけど、全然違う場所に來たみたいだ。

…違う場所に？

にわかに鼓動が速くなる。大きく息を吸い込んだ私の耳に、何やらポン、ポン、という柔らかな破裂音と、ざわざわとした喧騒が聞こえてきた。…外から？

窓に近寄った。遠くにコバルトブルーの海が見える、わぁキレイ。じゃなくて！私、いわゆる海なし県に住んではずなんですが！？

外に広がるのは、白っぽいレンガ造りの、全く見覚えのない街並み。窓辺や街路にはこれでもかというほど花が溢れている。ポンポンいつてるのは花火の音らしく、青空に白煙が上がっていた。街灯にはきれいなカラーテープが張り巡らされ、紙吹雪が風に舞う。まるで
お祭り…いやお祭りだ。そのものだ。

街路やその先の広場には出店が並び、道行く人々はみんな笑顔で、何か食べ物をほおばったり大道芸を眺めたり…。

んん！？ 道行く人々みんな…ホントにみんながみんな、金髪？

「ここどこ！？ 外国！？」

泡を食ってキョロキョロする私の目に、本棚の本の背表紙が飛び込んできた。

普通に知っている文字なのに、読もうとしたら頭がクラッ。もう一度マジマジと背表紙を見て、やっとそのめまいの原因がわかる。

そこにある本は全て英文タイトルなのに、文字がひっくり返っているのだ。ただ向きが逆さまだけでなく、左右もひっくり返っている。鏡文字というやつだ。

あわてて他の本棚を見ても、すべて同じ。読めることは読めるよ、本を逆さまに持って、鏡で映しながらならね。でもなんでこんな本ばかり？

「…ああもうワケわかんない」

とにかく、ここがどこなのかを確かめないと。

私は窓の反対側、部屋の隅にあるごく普通のドアまで歩き、泥棒の気分でコツソリ開けた。

廊下は薄暗く、人気がない。きつと人々はみんな、外のお祭りに行ってるんだろ。何のお祭りだか知らないけどね。

ドアを後ろ手に閉めて、右手に見えた階段の方へ歩きかけ…ピタリ。足を止めた私は、そのまま後ずさりして、バツと壁に貼られた真新

しいポスターに向き合った。

大きく引き伸ばされた、私の顔写真が、あった。

写真には英文で文章が添えられている。けどこれも文字がひっくり返ってる。んがあっ、サツと読めないのがもどかしい！とにかく必死で読む。

『レイフェール春の祭典にて、異世界より領主さまの花嫁が、無事に召喚された模様！ 期間中、街のどこかに現れます。最初に発見・保護し、祭典終了までに領主館に連れてきた人に、賞金100000000マニー！！』

私は回れ右をして図書室に戻り、ドアを閉めると、押し殺した声で叫んだ。

「なんつつじやそりやああ…！」

普通は異世界に来たと知ったら、まずはパニクるかドン引くか現実逃避するかだと思うけど、私はその段階をすっ飛ばして、怒髪天を突いた。アタマがヤカンみたいに沸騰してピーツとかいいそう。

小説やマンガじゃあるまいし、異世界って何さ？ いや、そこにくだわってたら話が進まないからともかくとして、つまり何か？ 私は勝手に異世界に呼び出されたあげく、指名手配の賞金首になり？ 私を捕まえた人はボロもつけ（何あの賞金の0の数！ マニって単位がわかんなかったけど！）、でもって私は領主と結婚せねばならないと？ けっ、王子様じゃなくて領主か…っていやいやいやいや。

あーでもデッドオアアライブじゃなくて良かったあ、『保護』って書いてあるし♪

なんて感謝なんかするか！ これお祭りイベントの一つっぽくね？ ひ、人のことダシにしてナニやらかしてくれちゃってんの…っ！

ダメだ、考えれば考えるほどムカついてくる。

冗談ポイだ、こうなったらせめて、祭典期間中は絶対に捕まってるもんか！

そう決意した私は、一気に冷静になって策を検討し始めた。

幸い今、この部屋とその付近に人はいないみたいだけど、いつまでもここに隠れているわけにはいかない。だって祭りやらが何日続くのかわからないんだもん、食事だのトイレだの生理現象はどうするの。

でも、不用意に外に出るわけにもいかない。あのポスターには私の顔写真がバーンと載っている。きつと街のあちこちに貼られているに違いない。どうやって手に入れたのか、ややピンボケな写真ではあったけど（しかも半目だった…女として勘弁して）、本物の私と並べてみたら本人だとわかってしまう程度には明瞭だったし、ご丁寧に外見上の特徴まで書き添えられていたのだ。『黒髪・黒目・肌は薄いクリーム色』とかなんとか。

「まさか、これが役に立つなんてね…」

私はトートバッグの中身を床に広げた。

トリップ直前、図書館に寄る前に買いに行っていたもの——それは、会社の創立三十年記念パーティーで使うグッズだった。

うちの会社、節目の年の創立記念パーティーで、入社三年以内の新人に出し物をやらせるという悪しき風習があるんだよね。惜しい、あと一年早く入社してれば、高みの見物ができたのに。

まあでも何かやらなきゃならないってことで、うちの支社の新人チームはガングロ女子高生に化けてパラパラを踊ることに…って微妙に古！でもみんな投げやり考えてるから、ロクな案が出ないのさ。

とにかく、適当なダンスをDVDか何かで覚えねばならないので、図書館に探しに行ったわけ。でも置いてなかったから、後日レンタ

ルショップに行こうと思ってただけど。

私はそんなことを思い返しつつ、

「男子がガングロやるから面白いのにな」

ぶつくさとぼやきながらブラウスの袖とチノパンの裾をまくり上げ、買ってきたグッズの中から舞台用のファンデーションを取り上げた。コンパクトミラーでチェックしながら、首や顔、手足…露出している部分全てに塗りたくる。日焼けしなくても、お手軽に小麦肌。いっそヤマンバメイクしてやろうかと思ったけど、そこまでは突き抜けれなかった二十五歳独身彼氏なし。

続いて、ショートボブの髪をジェルでなでつけてまとめると、長い金色のウィッグをかぶる。ピンクとかグリーンとか選ばなくて良かった。

目の色はどうしようもないけど――さすがにカラコンまでは買っていなかった――まあ私の瞳は色素がやや薄目で、光の加減によっては茶色に見えないこともないからいいか。念のため、ウィッグの長めの前髪を、目に少しかかるように前に下ろしておく。

支度を終え、もう一度窓に近づき、金色の川のような人の流れを見下ろした。

木を隠すには森の中、人を隠すには人の中。あの中に混じってしまった。

「女は度胸！」

私は頬を両手でパンと叩いて気合いを入れると、もう一度その部屋を出た。

第二話 異世界の祭り見物は実益をかねて

いざ、異世界人の中へ突入！

という前フリをしておいて何だけど、私は階段を下りず、逆に上って屋上に出た。風に吹かれてなびく金色のウィッグをおさえ、鉄柵の隙間から見下ろすと、街が一望できる。

考えた事は二つ。

その一・領主の館はどこじゃあ！　ウツカリ近づいてアツサリ捕獲されるなんてゴメンだ。場所は確認しておかねば。

その二・どっちへ行けば街を脱出できるんじゃあ！　お祭りはこの街——レイフェールの街だっけ？　の中だけでやってるみたいだから、街からとんずらしてしまえば、少なくとも私をダシに儲ける輩を作らずに済むわけで。

…私が読んだことがある異世界トリップものの小説だと、主人公はまず村や町などを目指していた気もするけど、私は逆だ。とにかくあの賞金がフユカイ極まりないので、異世界観光とかどうでもいいからサクツと山とか森とかに潜みたい（危険がなければ）。

その一はすぐにわかった。屋上から見るとこの街は円形をしていて、中央の広場から放射状に大通りが広がってるんだけど、そのうちの一本のつきあたり、丘を背にした所に、立派な白亜の建物があったのだ。エメラルドグリーンの屋根に翻る旗…他に旗が立ってる建物はないから、あそこが領主の館だと思う。

…その二もすぐにわかった。街を出るには、どっちでもいいから領主の館以外の方向のつきあたりまで行けばいい。

なんですぐにわかったかって？　検問所があつたからだよ！

この街、低いながらもぐるりと壁に囲まれていて、三か所の門で出

入りをチェックしてる人がいるのが見える。通行がほとんど滞らないところを見ると、ホントに簡単なチェックなんだろうけど、もし身分証明とか求められたらアウト。

やっぱり、街なかで人に紛れて祭りが終わるのを待つしかない。私は今度こそ、階段を下まで降りた。

一階まで降り切ったところで、玄関の両開きのガラスドアから若い男女が一組入ってきた。私は堂々と二人とすれ違う。

こっそり観察：男性の方は普通の白人の若者に見える。金髪ロングヘア。女性の方は、やっぱり金髪だけど顔はアジア系っぽい。まるで変装した私みたい。服装は私から見るとかなり地味だけど、違和感はない。

ドアを出るとき、後ろから二人の会話が聞こえてきた。

「こういうところに出てきたりはしないのかなあ、花嫁さん」

「とりあえず、グルッと探してみようよ」

やっぱり探されてるよ私！ 額に汗がにじむ。でもバレなかったからヨシ！

そしてその二人の会話は、普通の英語だった。英語は日常会話なら一応できるから、これなら情報収集できる。

良かった、音までひっくり返ってなくて…録音して逆回しにしないとわからない言葉とかだったら、もう初めて出会った言語と変わんないよ。

とにかく急いで建物を出る。表札を確認すると、私がいたのは学校みたいだった。

今度こそ、人ごみに紛れた。

例のポスター、店先なんか結構貼られてる。そういう場所ではちよつとうつむいたりしつつ、あたりに目を走らせる。

楽しそうに街を闊歩する、金髪の老若男女…うーむ、見れば見るほ

どすごい。何がって、全員ロングヘアなんだよね。街中が金色にキラキラして人工的に見えるくらいだよ。

明らかに、ソレ似合わないだろ！　って人もいるんだけど、まあそれは日本人の私の感覚であって、こちらではロングが主流なのかも会話を耳にはさんでいると、ちらほらわからない単語が出てくるけど、どうやらそれらはほとんど固有名詞みたいだった。

まずは、人の多そうな広場を目指す。

情報を集めるにはどうしたらいいかな？　てか、どうにかして手っ取り早く元の世界に帰る方法がわからないものか。魔法か何かで召喚した人がいるなら、そいつを探し出すとかして。

これが小説なら、一行で終わらせたい。

『異世界にトリップしました。イベント召喚にムカついて、魔法使いを脅して数時間で日本に帰りました。完』
って具合に。あ、小説にならないか。

出店の並ぶ、石畳の広場に出た。すぐそこに大きな掲示板があって例の文字で書かれたイベントスケジュールが貼り出されている。終わったイベントは線で消されているのでわかりやすい。

ふんふん、お祭りは夜通し続けられ、明日の夕方で終わるみたい。よっし、それくらいなら乗り切ってみせる！　その後のことはその後！

「ちょっとアンタ！」

気合を入れていたら、後ろからいきなり声をかけられた。

え？　誰？　私、じゃないよね？

恐る恐る振り向くと、かつぶくのいい金髪碧眼のおばさんがまっすぐこっちを見ていた。私の後ろに誰か…いるわけない、掲示板の前だし。

おばさんは、私の今の肌よりもこんがりと日焼けした腕で、ビールケースみたいなものを抱えている。ほっぺの肉の垂れ下がり具合といったら、瞬間的に『こぶとりじいさん』の絵本を思い出したくらいだ。

その肉をぶるぶるさせながら、おばさんは威勢よく話しかけてきた。
「この間の子でしょ？　すぐわかったよ、アタシと同じでいい色に焼けてるからさ」

ぎよえっ、誰かに間違われた！　ガングロって人相わかりにくいし！
「あん時は悪かったねえ、断っちゃって。その後、仕事見つかったの？」

脳細胞を必死で奮い起こして考えた。

このおばさんが私と間違えてる誰かは、最近おばさんの在籍している会社だか店だか（ビールケースから見えておそらく飲食店）で雇ってもらおうとした。けど断られた、そういうこと？　そういうことでいいよね？

私は、えへへ、とあいまいに笑った。

「いや、それが、全然見つからなくて」
すると、おばさんの目がキラリ。

「そう！　実はあの後、急に店員が二人もやめちゃってさ、人手が足りなくて困ってんだよね。未経験でもいいから、アンタどう！？」
はい！？　ま、まだこっちの世界のこと何も分かってないのに、いきなり仕事！？　それヤバイよ、絶対ボロ出るって…！

私はエプロンをつけ、トレイを手に屋台の前に立っていた。

…なんでこうなる。強引だなあのおばさん。

屋台は木製で、どこかカントリー風。看板には『ロザラインの店』

…ロザラインって顔かいな、あのおばさん。

そこは、『ジャンジユ』という食べ物——肉や野菜の入った焼きまんじゅうみたいなものと、各種飲み物売る大きな屋台だった。おばさんは普段は街なかでレストランをやっていて、お祭りの時だけ数人のスタッフで屋台を出しているってことみたい。

広場の真ん中にはテーブルとイスがたくさん並べてあって、人々は好きな食べ物をその辺の屋台で買ってきて、そこで食べている。そろそろお昼時なのか。

私の仕事はウェイトレスだけど、お店は基本、セルフサービス。大量買いする人がいたりお年寄りが運びにくそうにしたりって時に手伝うだけで、割とヒマだ。ただし、夜にかけて忙しくなるらしい。

おばさんは本店に戻ったけど、その前に嬉しい申し出をしてくれた。

「ミモレット！ お昼まだなら、今のうちにこれ食うときな」

「うわ、ありがとう！」

賄い飯つきだよ、ラッキー！ こっちの通貨持ってないからめっちゃ助かる！ 私は焼きたてのジャンジユをおばさんから受け取った。うほほ。

そう、おばさんに「名前何だっけ？」って言われて、とっさに普段ネット上で使っている名前『ミモレット』を名乗ったんだよね。こちらの名前としても違和感なさそうだったし、私の本名っていかにも日本人だから。

ふふん、まさか異世界から来た人間が変装道具持ってて、来た当日からこんなところで働いてるなんて、誰も思わないよね。就職断られた誰かさん、サンキュー！ 別のワリのいい仕事が見つかったことを祈るよ！

第二話 異世界の祭り見物は実益をかねて（後書き）

お気に入り登録、ありがとうございます！ 次話、『ミモレット』
と屋台のスタッフとの交流が始まります。

第三話 異世界モラトリウムは自分探しと労働から

今、私“ミモレット”が就職したこの屋台には、私を含めて四人のスタッフがいる。全員同年代の男女だ。

まず一人目。

「ミモレットが来てくれて助かったよ、祭りで人手がいる時だからさ」

顔全体で笑いながら、屋台でジャンジュを焼いている男性・マテオ。四人の中では一番の古参らしく、いかにも慣れた手つきの威勢のいい兄ちゃん。ロザラインおばさんともツーカーって感じだった。金髪を首の後ろで結んでる。

二人目。

「俺も、働き始めたばかりなんだ。よろしく…」

本店と屋台の間を行き来して荷物を運んだり、手が空いてる時は私と同じく給仕の仕事をしたりしている男性・ジェイド。礼儀正しいし仕事は丁寧だけど、こういう仕事が初めてなのか、どこか危なっかしい感じ。金髪を一本の三つ編みにしていて可愛い。

三人目。

「ミモレットは家は遠いの？ 今夜は本店に泊まったらいいわ」

ジャンジュの皮をこねながら、朗らかに言ってくれる女性・アナイス。あのおばさんの姪なのにスレンダーな、でも出るところ出てる、そばかす美人。私が男だったらよろめいてる。ていうか、もうお姉さまと呼ばせて下さい。金髪ワンレン。

そして私の四人で、明日の祭り終了までこの屋台を運営していくんだって。おお、やったるうじゃないの。私は三人に笑顔を返した。

「一晩くらい徹夜したって平気！ よろしく！」

一応、まだ若いからね！

仕事はそんなに忙しくはないんだけど、お客さんが途切れることはなかった。ジャンジユって、このあたりでは国民的な食べ物みたい。せつせと働いて、だいぶ慣れてきたなと思ってふと気づいたら、時間は順調に過ぎていた。

広場ではマーチングバンドみたいな楽隊の演奏があつたり、子どもたちが参加するゲーム（たぶんジャンケンゲームみたいなもの）があつたりと、賑やかなイベントが続いてる。

忙しくなる前に、交代で休憩を取ることにした。まずマテオと私。「よし、それじゃあぐるつと街を回って花嫁探ししよう！」

明るい茶色の瞳のマテオは、頭をポリポリかきながらニカツと笑う。ええー、いいよ探さなくて…と思ったけど、私は笑って「おーけい」と言うしかない。異世界で自分探し、モラトリウムですな〜ってアホくさ！

賑やかなメインストリートを歩いたり、ちょっと路地裏の方に入ってみたりしながら、祭り見物がてら街を歩く。あの学校の近くも通った。

それにしても、いかにも人探しをしている風の人たちって、なぜかみんな男女ペアなんだよね。ああ、もしかして、花嫁をおびえさせないため？ いきなり知らない男に領主の館に連れて行かれそうになつたら怖いもんね。女の人がいた方がそりゃ安心するわ。賞金も山分けするのかな。

“ミモレット”について色々聞かれるとまずいので、こちらからマテオにちょいちょい質問してみる。攻撃は最大の防御だ。話好きのマテオは、おばさんの人柄や自分の失敗談なんかをあけっぴろげに話してくれた。

彼はほどなく足を止め、

「このくらいでいいか。後は大道芸でも見に行く？」

「花嫁はもういいの？」

聞くと、彼は答えた。

「ま、縁起ものだから」

縁起もの？ 見つからなくても、探すことに意義があるみたいなの？

何だソレ。

とりあえず、マテオは賞金にガツガツしてはいないらしい。ホツとした。

トイレとか色々済ませて屋台に戻ると、次はアナイスとジェイドが休憩。再び四人で仕事を始めるころには、陽が傾いてきていた。夜メニューなんかも新しく作り始めて、お酒も出始めて、店は一気に忙しくなる。

気取った店じゃないので私も意外とボ口を出すことなく、むしろノリノリ。

「ジャンジュ今焼きあがりました！ 焼きたてはいかが？」

などと呼び込みをしながら、お会計も手伝うようになったし、隣の屋台のお姉さんと世間話（天気の話くらいだけど）したり、その辺の散らかったテーブルをささっと片付けたりする余裕も。

「助かるな、オレ調理に集中できるよ」

マテオは褒めてくれるし、

「ミモレット、飲み物の販売任せちゃっていい？ 私ちよつとあっち手伝ってくる！」

アナイスなんて本店に行っちゃった。私、意外と接客業向いてるのかも。元の世界では製薬会社の事務なんだけど、職業の選択間違ってたかな。

いやいや、いい気になってると大失敗するのは世の常。外国に来ただけみたいな気分になってたけど、ここは異世界なんだから、気をつけなきゃ。

そうこうするうちに夜も更けて、広場のお客さんはずいぶん減ってきた。このまま飲み明かす予定らしいおじさんたちが残ってるくらいだ。

この時間は大道芸や楽隊の演技もなく、人の話し声も抑え気味…だったのに、向こうが騒がしい。

見ると、広場の真ん中あたりのテーブルに陣取った三人組のおじさんが、ジェイドに絡んでいる。

「すみません、すみません」

「いいから。ぶつかったことはもういいからよう。それはいいから、これ飲んでけ」

「いえ、仕事中ですのでっ」

「兄ちゃん一杯だけ！ な！」

…あのさ。異世界にトリップした私がピンチに陥って、イケメンに助けられて恋愛フラグが立つならわかるよ。

なのに、ジェイド。さっきからおつりは間違えるわ荷物抱えたまま転ぶわ、そして酔客に絡まれるのも二回目。私のフラグを片っ端からかつさらっておりますことよ。あんたが異世界人か。

真面目すぎて絡むと面白いんだろうな…と思いつつ、仕方なく私はスタスタと近づいて行って、

「なんかやらかしちゃった？ おっちゃんゴメンね！」

無造作に笑顔で割り込んだ。相手は怒ってるわけじゃなく楽しそうなんだから、テンションを合わせてやるのが一番。言葉もなるべくブロークンに。

「ねえ、代わりにあたしがご相伴してもいい？」

「おお、飲め飲め！」

「行きまーす」

渡されたグラスを一気におおうとしたら、がしっと腕をつかまれてジェイドに止められた。

「だっ、ダメだ！ 女の子が！ 仕事中だし！ ちょっとこっち来て！ 失礼します！」

ぐいぐいと屋台の方に引つ張られる。私はおじさんたちに「またね」とひらひら手を振りながら、逆らわず歩いた。

ニヤニヤしているマテオに見送られ、屋台の裏手に回る。あらら、なんか説教されそう。

「ミモレットっ、一気しようとしたでしょ！？ 倒れたらどうす」

「うまく逃げられたね」

「え？ あ？」

言葉が続かないジェイドの肩を、ポンポンと叩く。

「私が飲もうとすれば、ジェイドなら止めてくれるかなって。いやいや、グッジョブグッジョブ」

別に、飲むことになったらなっただで、「ごちそうさま」、じゃ〜ね〜」でジェイドを連れてくれば良かったし。独身女子がわざわざ言うことじゃないから言わないけど、ぶっちゃけ私はザルだ。

ジェイドは気を取り直したように息を吸い込んで、

「そうじゃなくて！ ミモレットって成人！？ 酒飲んでいいの！？」

そこかよ！ って、何歳だと思ってるの？ そういえば十九歳でアメリカにホームステイした時、十三〜四歳に間違われたっけ。やっぱり日本人って若く見られるんだな。

「二十過ぎてますっ。はいはい、仕事戻ろっ」

「…。」

急に黙ったジェイドは、少し間をおいてから、焦ったように言った。「いや…ごめん。ありがとう」

そして、頭を軽くかいて、少し笑った。ふふ、ホント好青年だよな。

第四話 異世界の真実は炎とともに現れて

それから特にはトラブルもなく、ちょっと手持ち無沙汰になったころ。

「二人とも、慣れない仕事で疲れただろ。しばらく俺一人で大丈夫だから休んでいいよ。本店の方で仮眠取ってもいいし」

マテオが言ってくれた。彼はまた頭をかいていた。癖なのか？ それともフケ性？ 日本のシャンプーをプレゼントしたいわ。

ジェイドが返事をする。

「それじゃあ、お言葉に甘えます。…ミモレット、仮眠取りに行く？」

「うーん、どうしようかな」

私はあいまいに答える。

一応、私、指名手配花嫁なのでね。のんびり寝られるとは思えないから、起きてようか。

それとも寝たふりしてる方が、無事に朝を迎えられる？

迷っていると、ジェイドが言った。

「良かったらこれから、花嫁探し付き合ってくれないかな？」

ええ？ こんな夜中にまで？

見ると、いつの間にかジェイドの手には、カンテラみたいなものでぶら下がっている。

「…そんなに花嫁見つけたいの？」

聞くと、

「うん」

即答かい。

ジェイドがお金に執着するタイプだとは思ってなかったので、何だか…がっかりした。

探したところで、異世界人が見つかるわけがない。隣にいるんだから。

油断なく周囲に目を走らせるジェイドは、集中しすぎて無言。時々、脇道に踏み込んで暗がりカンテラで照らしている。

一緒に歩きながら、私はあくびをひとつ。さすがにちょっと退屈でメインストリートは夜でもガス灯らしきもので照らされ、それなりに明るい。私は歩きながら、広場に置いてあったお祭りのプログラムを読んで眠気を紛らわす。

プログラムの最初のところに、祭典の実行委員長さんのあいさつが書いてあった。

『今年も、三百年の伝統を誇る春の祭典で、皆さまと共に豊作を祈願でき、喜ばしい限りです』

豊作祈願か！！それに私がどう絡むのよっ。

『初代領主が、異世界からの客人と結ばれてから、レイフェールの地は豊饒の女神に守られ肥沃な土地となりました。今回の祭典では、新領主が年頃ということで、花嫁の召喚も期待されております。お楽しみに！』

…最後の一言がなんか脳天気でムカつく。

いやそれより、召喚って私が初めてじゃないんじゃん！ 迷惑な話それにこの文面だと、領主が結婚適齢期だと召喚が起こる、みたいな風に取りれる。さらに、この文章が書かれた時点では、起こるか起こらないかはつきりしてなかったってこと？

私てつきり、偉そうな魔法使いが「ふはははは、私がお前を召喚したのだ」ってふんぞり返るんだと思ってたけど、受ける印象が微妙に違う。

神のみ業とか、自然現象とかなの？ そしたら逆らえないじゃないのさ！

まあいい（よくないけど）。今はこの祭典を乗りきること。

えーと、ここに明日のスケジュールが載ってるんだけど…祭典のク
ライマックスであろう時間帯に、『投げる』って書いてある。特に
説明はないんだけど、何を投げるのかな。トマト投げあうとか…お
菓子撒いてくれるとか？ あ、お金！ お金希望！

「ミモレット。…ミモレット？」

「あ、え？ 何？」

一枚のプログラムに、思いのほか没頭してた。お金にガツガツして
るのは誰だよって話。

顔を上げると、ジェイドがこちらを見ている。

「…そろそろ戻ろうかと思って」

「もういいの？」

「うん。付き合ってくれて、ありがとう」

結局、本店（ダイニングバーといった趣のお店だった）に寄ってち
よっと休ませてもらったなら、休憩室のソファでウトウトしちゃった
よ。人間、そうそう緊張感は続かないって。

明け方にジェイドやアナイスと広場に戻ったけど、同年代の人たち
と徹夜で屋台やるのって、なんだか学生時代の文化祭を思い出すな。

そして、新しい朝が来た。希望の朝になりますように！

午前中には、女神像の山車が街中を回った。木彫りの美人な女神像
は、生花でできたドレスを着ていて見たえがあって、子どもたちが
後ろをついて歩いてるのも賑やかで可愛かった。もし私がまだ隠
れていたなら、気になってこっそり観に出てきちゃったかも。

…はっ。日本の神話でそういうのなかったっけ！？ 洞窟に閉じこ
もっちゃった神様を引っ張り出すために、洞窟の前でお祭り騒ぎを
やる話が。もしかして、花嫁が自分から出てくるように、祭典期間
中に召喚するんじゃない？ するどいぞ私。

お昼の忙しさが一段落したころ、広場の中央のテーブルや椅子が脇へよけられ、キャンプファイヤーの木組みらしきものが作られ始めた。

屋台の脇でそれを眺めていると、

「ミモレット」

ジェイドが近づいてきて、私に紙袋を差し出してきた。なんとなく受け取りながら、

「何？」

聞くと、ジェイドは私をじっと見つめながら言った。

「昨日、助けてくれたお礼」

「ええ？ そんなのいいのに」

ビックリして紙袋とジェイドを見比べていると、こう言われた。

「何か困ったことがあったら、使って」

「…？ ありがとう」

お礼を言っただ袋を開けようとした時、拍手が聞こえて来て私は顔を上げた。

広場の片隅にある小さなステージで、閉会式が始まっていた。

偉そうな小太りのおじさん（やっぱり金髪ロン毛）が、金魚すくいのポイみたいなものを手に持ってあいさつしてる…声が大きく聞こえるってことは、あのポイが拡声器とかマイクみたいなものなんだろう。

げっ、まさかあのおじさんが領主？ いやいや、領主はお年頃だつて、プログラムに書いてあったじゃん。あのおじさん、お年頃×三くらいだもん、違う違う。

そう思いながら退屈な演説を聞いていると、おじさんは祭典の実行委員長だということが分かった。すると領主はどこに？

ちよっと背伸びしてあたりを見渡してみる。ステージ周辺に何人か若い男性がいるけど…あの人？ ご免こうむる。それともあの人？

味噌汁で顔洗って出直してこい。

勝手に品定めしてるうちに、木組みに火が入って燃え始めた。広場はだんだん人が増え、木組みの周りに集まって来ている。

あ、あのプログラムに書いてあった『投げる』ってやつが始まるんじゃない？

私はのんきに、その時を待つ。

「それでは皆さん、ご一緒に！」

実行委員長の合図で、ドラムロール（こつちでもあるのね）とカウントダウンが始まった。すると、集まった人々がみんな、一斉に自分の頭に手をあてた。

何、何？ 私も真似した方がいい？

「三、二、一、ゼロ！」

その瞬間。

金色だった視界が、緑色になった。

人々の髪の色が、一斉に緑色に変わったように見えた。掛け声とともに、金色にたなびくものが次々とキャンプファイアの中に飛び込んでいく。その光景を理解するのに数秒かった。

金色のものは、私がかぶっているような金髪のウィッグで。

「俺たちも行こうぜ」

「やほ」

屋台から出てきたマテオが、後ろで結んだ金髪を引っ張ると、短く刈り込んだ驚色の髪が現れた。後に続くアナイスの髪は、肩までのウェーブがかった若草色。

この街の人たち、本当は金髪じゃなくて、明るい緑色系の髪をしていたのだ。つまり…

ぜん い ん ズ ラ

「……！」

私はくるりと身を翻して、屋台の後ろに回りこむと路地に駆け込んだ。

投げるって、コレ！？ 宙を舞う金色のズラ・ズラ・ズラ……うっ、ある意味ホラーで夢に出てきそう。来る、きつと来る。

最初に街なかに出た時、妙に金色が人工的に見えたわけだ！

道理でマテオが頭をしょっちゅうポリポリ掻いてたはずだよ！ ム
れるよ！ そういやジェイドが掻いてるのも見た！

ジェイド……。

私はハツとして、手に持ったままだった紙袋を開けた。困った時に使えと言われた、これは？

中に入っていたのは、白い帽子だった。マッシュルームみたいな形で下の部分が締まっていて、一歩間違うと給食当番の帽子みたいなデザインなのが、危ういところで回避されている感じ。…髪がすっぽり隠せるデザインだ。

迷ってる暇はない。街のみんなが金髪のウィッグを外した以上、私だけ被ってたら怪しすぎる。

私は緊張に汗ばむ手で、すばやくウィッグを外して紙袋に突っ込んだ。急いで帽子を被り、黒髪を隠す。

そして、とにかく広場に戻ろうと振り向いた時。

「ミモレット……あ、いや、違っのかな。名前……」
路地の入口に、ジェイドが立っていた。

第四話 異世界の真実は炎とともに現れて（後書き）

下書きの段階でこのへんまで書いた時、こんなアレな展開の話を書いている自分に愕然として、くじけそうになりました（笑） いたたまれないので、今日に続いて明日の夜には完結編をupします。あと一話なのでお付き合いください！

あ、拍手ボタン設置しました（↑ いい根性）

携帯版拍手ボタンも後から追加

第五話 異世界の結婚は相手をよく見極めてから

広場に後から後から集まってきた街の人々が、次々とウィッグをキヤンプファイアーに放り込んでいく。それが済むと、火を囲んでちよつとしたダンス大会になった。これがしばらく続いてから、祭典は終了ということらしい。

花嫁探しのイベントも、それまでは続く。

私とジェイドは、屋台のそばで微妙な距離を開けて立ち、目を合わさずに、踊る炎を眺めていた。

「昨日、助けてくれた時」

ジェイドが、ためらいがちに口を開いた。

緑灰色の、少し癖のあるミディアムヘア。私の世界にはない髪色なのに、金髪よりもしくりくるのが不思議。

「成人なのかって聞いたたら、ミモレットは『二十過ぎてる』って答えたよね。この国の法律では、飲酒は二十二からなんだ。…まあ、その時は、『二十過ぎてるから大目に見て』って意味かと思ったんだけど」

ああ〜くっそ！ そうだよ、日本の常識で考えちゃダメだって！ 内地団太を踏みつつ、私は黙って彼の話を聞く。

ジェイドは申し訳なさそうに、

「そのあと、夜に花嫁探しに付き合ってもらった時…君、祭典のプログラム、逆さに持って読んでたよね…」

「がびーん！ しまった！ 眠さのあまり無意識に！」

「さすがにそれで、変だなって思った。…そのあと、本店のソファでミモレットが眠ってたんで、俺…そつと近づいて…」

何よ！？ 寝てる私に何したの！？

「近くでよくよく顔を見たら、まつ毛が黒かった」

「げふつごほつ」

頭の中で、白旗が翻る。…参りました。
常識の違つ異世界で逃げ切れれると思うなんて、考えが甘かった。

私はため息をついて言った。

「…良かったじゃない、あんなに花嫁見つけたがってたんだし。これで賞金もらえるよ。領主のところに連れていけば？」

「そうじゃない」

ジェイドは、ふてくされる私の方に向き直った。

「召喚、街の人は当たり前みたいに喜んでたけど…いきなり違う世界に勝手に呼ぶなんて、俺はあんまりだと思う。しかも結婚って…。だから、俺が一番最初に見つけて、不安だろうから色々説明して守ってあげたかったんだ。匿ってもいいと思ってた」

顔を上げたら、視線が合った。まっすぐに見つめられている。

なによ…いい奴じゃん。お金のためじゃなかったんだ。

やっぱり、真面目だなあ。

「それに…」

ふつ、と目をそらして下を向くジェイド。ん？ 顔がちよつと赤い？

「もし…もしも万が一、その女性がこちらの世界を受け入れて、結婚を望むなら…自分の花嫁くらい、自分で見つけたかったし…」

え？ 今なんて？

そこへ、別の声が割り込んだ。

「そろそろ時間だよ、ジェイド！」

わあ、ロザラインおばさん登場！

髪の毛が蛍光グリーンのパンチパーマだ、色々と期待を裏切らないお方。

「はい」

ジェイドが応え、私を見て言った。

「おばさんたちと一緒にいて」

そして返事を待たず、ステージの方へ走って行った。

え、これ以上何が起こるの？

ステージ周辺が賑やかになり、ジェイドが例のポイマイクを持って壇上に上がるのが見えた。そして、彼の声が…。

『レイフェールの街のみなさん、初めまして。このたび領主に着任した、ジェイド・レビウスです』

「えっ！？ ジェイドが新しい領主！？」

声を上げたのは私じゃなくて、屋台から顔を突き出したマテオです。私はただ絶句してただけなので。

「ちょ、ミモレット知ってた！？」

あんたらが知らないのに私を知るわけないだろー！！

ステージ上ではジェイドのあいさつが続いている。

『ずっと留学でこの地を離れておりましたが、このたび病気の伯父のあとを継ぐことになり、故郷に戻って来ました。今現在のこの街のことを知りたくて、祭典期間中は皆さんと一緒に働かせていただいております』

アナイスがくすくす笑う。

「私は知ってたんだ、実は。それにロザラインおばさんも」

「そうなの！？」

「祭典の何日か前に、飛び込みでおばさんの店に来たの。前領主の急病でいきなり領主に着任したけど、外国で勉強ばかりしてたから、社会勉強のためにこっそりこの街で働いてみたいって」

やっぱりジエイドって真面目だ。私は微笑んだ。

きつと彼なら、私のことも悪いようにはしないだろう。たった二日、一緒に働いただけだけど、そう確信が持てた。

「ま、そういうわけで、ジエイドは今日で店辞めちゃうからさ。ミモレット、その分もよろしく頼むよ！」

バンとおばさんに背中を叩かれて、たたらを踏む。うへえ。

ステージでは、ジエイドが司会のお姉さんにインタビューされている。

『花嫁が未だに発見されていないようですが？』

『ええ…そうですね、本当に召喚されたんですかねえ、ハハハ』

誤魔化そうとしてか、セリフ棒読みで無理矢理笑ってる。大根だなあ。

「…もし、花嫁が自分から領主のところに行ったら、賞金ってどうなるのかな」

ジエイドを見つめたまま尋ねると、アナイスが答えてくれた。

「そりゃあ、誰にも支払われないんじゃない？」

「そっか。私をネタに誰かが儲けるわけじゃないなら、ちょっと安心した」

私は言うつと、スタスタとステージに近寄って行って、勝手に壇上に上った。

「み、ミモレット」

あわてるジエイドの横に立ち、私は帽子を脱いだ。黒髪がこぼれおちる。観衆がどよめく。ちょっといい気分。

「貸してよ」

私はジェイドからポイマイクを奪い取ると、ぺこりと頭を下げてから笑顔でこう言った。

『昨日、召喚されました、羽田野　ちづ——チヅ・ハタノです。私も、立派な新領主さまにならって、こちらの世界を知るためにしばらくこの街で働かせていただきたいと思います。どうぞよろしく』

どつと歓声がわき、広場はやんやんやの大騒ぎになった。こう言っけば、誰も結婚をいまずぐには強制しないでしょ。

「え、えと、ミモレット、働くって？　その…結婚はどうするかとかは」

ジェイドがどもりどもり話しかけてくるのを、すっぱりと遮る。

「ちづ」

「あ、ち…チーズ？」

それ私の小学校時代のあだ名だよ。だからミモレットチーズから名前を取ったんだよ。パルメザンとかゴーダより響きが可愛かったからさ。

「ち・づ。…なんで今すぐ結婚するかどうか決めなきゃいけないのよ。仕事も見つかったことだし、とりあえず私、この街で住む場所見つけようつと」

「えっ、あの…領主館に住んだら」

「結構です。あなたの家に住んで、事実婚になったら困りますのであぁ、でも後で話は聞かせてもらいますから、召喚について詳しく教えて下さいね、領主さま」

日本に帰れるのか調べないと。それに、この人のことも、もっと…知らないよね。

うるたえるジェイドに、私は微笑みかけた。

閉会式が終わり、私はひとまず本店でシャワーを借りて、肌の色を落とした。

本当の姿に戻った私を見たジェイドは、いきなり顔を真っ赤にして目を回してぶっ倒れてしまった。どういう反応？

なぜか周りの人々はヒューヒュー言ってたけど、あらら、慣れない仕事と必死の花嫁探しを同時進行してテンパってたみたいだから、疲れたんでしょ。いきなり領主になれって言われて故郷に連れ戻されたそうだし、私の状況と似てると言えなくもない。

それにしても、異世界に来て気絶って、私のやることじゃないのかね？ つくづく、私のフラグを横取りする奴だ。

その後、ロザラインおばさんやアナイス、マテオたちに聞いた話によると。

召喚というのは神のみ業らしいよ…がつくし。教会みたいな場所があつて、そこに新しい領主が着任の報告に訪れると、領主が独身だった場合だけ、その年の祭典で勝手に召喚が起こるんだって。

祭典の初日、花嫁の姿が教会の大きな鏡に浮かび上がるんだそうだ。担当者（？）が鏡をすかさず写真撮影して、大急ぎで作ったのが、あの半目ポスターだってさ。

過去にも数人が召喚されてるんだけど、元の世界に帰った人もいるし（何か条件があるらしいけど）、行き来した人もいるという言い伝えがあるんだとか。

そして、この祭典で行われた数々の不思議な風習については。

初代領主と結婚した異世界人が金髪だったんで、それを記念して期間中はみんな金髪のウィッグを被るんだとか。

どういうわけか毎度毎度、召喚された女性を最初に発見するのが領主で、賞金は過去一度も支払われたことがない（キャリアオーバー

発生中)とか。

それがまるで二人を引き合わせているかのようだという事で、『恋人同士で花嫁探しをするとその二人は幸せになる』というジンクスまであるとか。

まあ…そういうことだそうですね。

そんな『幸運の女神』状態の私がいる『ロザラインの店』は、祭典以来大繁盛。

ジエイドも毎日のように通ってくる。

「チヅ…俺、領主やつぱり向いてないかも…。ど、どうかつ、俺のそばで手伝ってくれませんかっ！」

「はいはい、弱気にならないの。今日は何食べる？」

やれやれ、これじゃあしばらく辞められないじゃないの。おばさん私の後任、ちゃんと探しておいてよね。

私が日本に帰るんで辞めるのか、領主の花嫁になるんで辞めるのかは、別にして…ね。

【金色フェスティバル 完】

第五話 異世界の結婚は相手をよく見極めてから（後書き）

『金色フェスティバル』改め『ヅラ祭り』（あ、「改め」はマズいか。別名）、これにて完結です。第四話で驚きと笑いを、第五話でスッキリ感とほのぼの感を提供できたらと思って書きましたが、いかがでしたでしょうか。書いている方は間違いなく楽しかったです（^^）

【前日談】 祭典の開幕（前書き）

告知用小話？ 詳しくはあとがきにて。

【前日談】 祭典の開幕

その店の前に立った時、ちょうどドアが開いて、中から若い女性がでてきた。よく日に焼けたその女性は、ため息をつきながら、俺がいることには気づかない様子でとぼとぼと去っていく。

俺が開いたドアから中を覗くと、恰幅のいい中年の女性と目が合った。彼女は頬の肉をたぶたと揺らしながら言った。

「店は夕方からだよ。……あれ？」

そして破顔して、座っていた椅子から立ち上がる。

「ジェイドじゃない？ まー、大きくなったねえ！」

「お久しぶりです、ロザラインおばさん。今の人、いいんですか」
俺はちよつと外を振り向く。

「ああ、うん。うちの店に就職希望の子だったんだけどね、手は足りてるから断っちまったのさ。いい子だったから、きつとすぐにいい仕事が見つかるよ」

「……」

俺はおばさんに向き直った。

「あの、実は、俺も同じ用件できたんです」
「え？」

「今日から、祭典が終わるまでの期間でいいんです。雑用でいいから、雇ってもらえませんか？」

「どうしたの、急に。あんた確か、どこか遠いところに留学してたんじゃない」

「俺、ここの領主に着任することになりました」

目を丸くするおばさんに、事情を説明する。前領主であつた伯父が、急病で倒れたこと。跡を継ぐはずだった伯父の息子はまだ7歳で、他の候補も様々な事情で領主にはなれず、予想外に俺にお鉢が

回ってきたこと。

「予想してなかったんで、俺、この街のことを何も知らないまま来てしまいました。小さい頃過ごしたただだし……。それで、少しでもこの街で働けば、空気みたいなものくらいはわかるかと思って。給料なんかはいりません、社会勉強ってことでこつそりと。だめですか？」

「そう、わかった。給料は安いし本当に雑用しかないけど、そういうことなら祭典期間中だけやってもらおうかね」

「ありがとうございます！」

俺はぺこりと頭を下げた。

「ジエイドって、まだ独身だよね？」

急に尋ねられた。

「もちろん、そうですけど……」

「うわ、じゃあ召喚が起こるんじゃないの！？ あたしが生きてるうちに召喚が起こるなんて！ こりゃあめでたいわ！」

おばさんは大興奮でゆっさゆっさしている。

召喚……か。それも、この街に到着してから聞いた話だった。なんて風習だ。

俺は、今朝見たばかりの彼女の写真を思い浮かべた。

「カツラは？ もう用意した？」

「いえ、まだ」

「じゃあこれ！」

がぼつ、と金髪のカツラを被せられた。髪が長くてうつとうしいので、いったん外して適当に一本に編み、もう一度被り直す。おばさんは自分も被りながら、大騒ぎでカウンターの奥の男女に声をかけている。

俺は密かに決意した。

仕事をしながら隙を見て、召喚されてきた女性を探そう。この街のどこかに現れるはずだ。きっと、突然のことに不安で怯えてしまっているに違いない。泣いてしまいかもしれない。

新領主の俺が守らなくてどうする！

店の奥からは、ロザラインおばさんが

「はいもしもし、あたしだけど。え？ 田舎に帰るから仕事やめる？ ちょ、困るわ急に！ 祭典で人手がいる時期なんだよっ」

と電話で何やら話す声が聞こえていたけれど、こぶしを握って決意を固めている俺の耳には入らなかった。

そして、威勢よく上がる花火の音とともに、祭典は幕を開けた。

【祭典の開幕 完】

【前日談】 祭典の開幕（後書き）

『金色フェスティバル』お気に入り登録、ありがとうございます。
続編『夏色ユニフォーム』をupしました。『金フェス』の雰囲気
を壊さないように書いたつもりですので、良かったらぜひお付き合
いください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1799t/>

金色フェスティバル

2011年8月18日15時24分発行